○村上智行委員長　続いて、立憲・無所属クラブの質疑を行います。

なお、質疑時間は答弁を含めて十分です。かっち恵委員。

○かっち恵委員　立憲・無所属クラブのかっち恵です。どうぞよろしくお願いします。

まず、N―E．X．T．ハイスクール構想とみやぎ県立高校将来ビジョンとの関係について伺います。

これを生徒の側から見たときに、今回のN―E．X．T．の三事業によって具体的にどのような生徒の学びが変わるのか、逆にこの三事業だけでは十分に恩恵が届かない生徒はどのような生徒なのか、将来ビジョンは、生徒を主語にした高校教育を掲げ、県内どこに住んでいても多様な興味・関心や進路希望に対応できる教育環境を目指しています。N―E．X．T．の先導事業についても、採択された高校や拠点校だけを見るのではなく、大幅に増加している不登校生徒をはじめ、様々な障害や認知特性のある生徒、外国人生徒、特定分野に特異な才能のある生徒、経済的に厳しい環境にある生徒など、そこから外れる生徒を含めて、県全体としてどのように教育機会を保障していくのか、伺います。

○小野寺邦貢教育委員会教育長　みやぎ県立高校将来ビジョンでは、県内どこに住んでいても全ての生徒の興味・関心や多様な進路希望に対応できる教育環境を確保するとしております。今回の事業でございますが、将来ビジョンを構成する取組のうち、国のN―E．X．T．ハイスクール構想に適合し、なおかつ国費を活用することで、我が県として最適となる取組に絞って実施することとしたものでございます。県教育委員会としましては、生徒一人一人の状況や特性に応じた学びを保障するため、履修方法や教育課程を工夫するとともに、オンラインなどのデジタル技術をフルに活用いたしまして、特別な配慮を必要とする生徒を含めた、全ての生徒の可能性を最大限に引き出すことができる学習環境を整備していきたいと考えております。

○かっち恵委員　私は、どの生徒にどのような学びが届いたのかを検証・評価する仕組みを構築することが必要だと考えます。例えばオンライン教育センターで新たに選択できるようになった授業、拠点校との連携によって他校の生徒が参加できる探求学習、工業高校間での共同利用できる設備や実習などです。第一期実施計画では、こうした生徒側の教育機会の変化を検証・評価できる仕組みを設ける考えがあるのか、伺います。

○小野寺邦貢教育委員会教育長　オンラインを活用した遠隔授業や実習設備等の共同利用などの新たな取組につきまして、学ぶ主体である生徒側の視点から客観的に検証・評価する仕組みを構築するということは大変重要であると認識しております。現在、将来ビジョンの実現に向けた具体的な取組を盛り込む第一期実施計画を策定しているところでございますが、県立高等学校将来構想審議会の下に検討部会を設けまして、取組の方向性や内容等について専門的な知見から御意見をいただいておりますほか、中学生やその保護者、地域住民の方などからも広く御意見を伺いながら作業を進めているところでございます。また、オンライン教育センターの取組におきましては、配信時間数や受信校数などのほか、生徒の満足度などを目標指標に位置づけておりまして、これらを基に評価や検証を行いながら進捗を管理してまいります。県教育委員会としましては、第一期実施計画の策定後も幅広く御意見を伺い、評価・検証を引き続き行いながら、事業の改善や充実に努めまして、学ぶ側の視点に立った質の高い高校教育の実現に取り組んでまいります。

○かっち恵委員　次に、将来ビジョンの中での普通科高校の位置づけについて伺います。

今回のＮ―Ｅ．Ｘ．Ｔ．の三事業を見ると、進学系拠点校、専門高校、オンライン教育というそれぞれの明確な役割を持った取組になっています。一方で、県立高校にはこうした拠点校や専門高校には位置づけられない地域の普通科高校もあります。将来ビジョンでは、普通科についても地域や学校の特色に応じた魅力化や探求的な学びを進めることとされています。第一期実施計画において、拠点校でも専門高校でもない普通科高校をどのように位置づけていくのか、Ｎ―Ｅ．Ｘ．Ｔ．の先導的な取組の成果を、こうした普通科高校の教育内容の改革にもつなげていくのか、伺います。

○小野寺邦貢教育委員会教育長　将来ビジョンにおきましては普通科の改革を推進することによりまして地域の特色や社会的ニーズに応じた新たな学科を設置するほか、地域や大学等と連携した探究的な学びを推進するなど、従来の普通科の考え方にとらわれず、新たな視点で各学校の魅力化を図るというふうにしております。仙台一高及びその協力校八校の取組は、文理横断型で論理的な思考力や科学的な課題解決力を育みまして、実社会で生かしていくものでございます。その成果は全県における普通科の改革にもつながるものと考えております。

○かっち恵委員　普通科高校が自校の特色ある学びをつくる際に、教職員に対するカリキュラムの開発支援、そして実際に使える教材、授業モデル、探求プログラム、外部人材とのネットワークなどを提供していく考えはあるのか、拠点校をつくることと、拠点校以外の学校を変えることをどのようにつなげるのか、伺います。

○小野寺邦貢教育委員会教育長　高校の普通科改革としては、現在、中新田高校において取組を進めておりまして、町や地元企業、商工会などと連携しながら、新たな学校設定教科「地域創造学」を開設いたしまして、来年四月の新入生から未来創造学科に転換するということを考えております。この取組でございますが、外部人材を積極的に活用いたしまして、カリキュラムの開発から具体的な授業・探求活動の展開に至るまで、全国的にも先進的な事例として注目されておりまして、仙台一高及びその協力校の取組も併せまして、こういったモデル校や拠点校における成果をそれ以外の高校に波及させてまいりたいと考えております。

○かっち恵委員　教育委員会では、第一期実施計画の策定に当たり、まず各圏域でどのような学びが必要なのかを検討し、その後に、学校規模や高校配置について検討するという二段階で進めるとしています。私は、この順序は非常に重要だと考えます。少子化が進む中では、学校数や学級数を先に考えるのではなく、宮城県の高校生にこれからどのような学びを残すかを先に考える必要があります。その意味で、N―E．X．T．の三事業についても、単に三校、四校、あるいは特定の拠点を整備する事業としてではなく、今後の宮城県にはどのような高校教育の機能が必要なのかを示すモデルとして位置づけるべきではないか、そして、県としてN―E．X．T．の三事業第一期実施計画における、これから宮城県が残し、広げていくべき学びのモデルとして活用していく考えがあるのか、伺います。

○小野寺邦貢教育委員会教育長　急速な少子化が進展する中におきましても、各圏域に必要な学びの在り方を一から考え、県内全ての地域におきまして、生徒の興味関心や多様な進路希望に対応できる教育機会を確保することが重要であると認識しております。第一期の実施計画の策定に当たりましては、先ほど申し上げましたモデル校や拠点校の取組を盛り込みまして、今後、全県に広げていくこととしておりまして、これから宮城県が残し、広げていく学びのモデルとして活用してまいりたいと考えております。

○かっち恵委員　ぜひ学校の数や配置を先に決めるのではなく、どのような学びを保障するのかを軸に第一期実施計画をつくっていただきたいと思います。そこで最後に、ＮＥ．Ｘ．Ｔ．の三事業を含め、今後の高校改革について、学校を整備したかではなく、多様な学び方を必要とする生徒が、どのような学びを選べるようになったのかという視点で検証していく考えがあるのか、伺います。

○小野寺邦貢教育委員会教育長　高校教育の創造的再構築に向けましては、従来の学びの在り方や学校配置の考え方にとらわれず、生徒の視点から教育課程や授業、学校運営等について捉え直し、新たな魅力ある高校教育を創造していくことが重要であると認識しております。そのため将来ビジョンにおきましては、生徒が画一的な教育課程や教育環境に合わせるのではなく、一人一人が自分自身のライフスタイルや興味・関心、将来の目標や進路希望に基づきまして、自らの学び方を主体的に選択し、設計できる教育環境を整備することとしております。県教育委員会としましては、こうした環境整備だけではなく、全ての生徒がどのような学びを選べるようになったのかという視点で、常に検証を行いながら、生徒に寄り添った高校教育の実現を目指してまいりたいと考えております。